

わたしたちは世界を救えるか？

中道基夫

世界には、様々な問題が満ちています。その問題に多くの人が苦しんでいます。

そのような問題は解決できると思いますか。それとも、そんなことは無理だと考えるでしょうか。そして、自分がその問題を解決しなければならない、もしくはその解決の一端を担いたい、その責任があると考えているでしょうか。それとも、そんなことは関係のないことなのでしょうか。

今から、130年前、関西学院の創設者W.R.ランバス宣教師が、日本にやってきた時は、単純に宗教を広めたい、キリスト教徒を1人でも増やしたいと思っていたわけではありません。おそらく、ランバス宣教師だけではなく、19世紀の終わり、多くの欧米の宣教師は「世界を救う」という意識で、海外に出かけていきました。また、欧米の多くのキリスト者が宣教師の活動を支えるために献金しました。世界宣教に遣われたお金は、莫大なものになるのではないのでしょうか。

教会を建て、学校を設立し、医療や福祉活動を行い、その土地の様々な問題を解決し、人類に幸福をもたらそうとしたのです。また、そうできるという確信をもっていました。そのおかげで、今わたしたちはこの美しいキャンパスをもつ関西学院で学ぶことができます。その働きは尊いものです。

しかし、世界は、過去100年の間にその「幸福」が必ずしも絶対的な幸福ではないことも経験したのです。むしろ、その「幸福」が人々に不幸をもたらせる結果にもなりました。

多様な価値観、生活様式、文化がある中で、必ずしもわたしたちが考える幸福が、他の人々の幸福にはならないことにも気がつきました。

じゃあ、わたしたちは手をこまねいて、とりあえずは自分たちだけの幸福を求めて、後はそれぞれが自己責任でやってもらうしかないのでしょうか。

おそらく、わたしたちは世界を救えないでしょう。その救いのイメージも明確ではありません。しかし、ランバス宣教師を動かした力を知る時、そしてそれを得る時、わたしたちは現代に相応しいその力の新しい発揮の仕方を見つけることができるのではないのでしょうか。その発見にこそ、ランバス宣教師が設立された関西学院大学で学ぶ意味があります。

(神学部教授)